



ここにこんな人が

「くい」屋、「基礎」屋 と言われて

丸五基礎工業(株) 平見 殖
代表取締役社長

平見 殖(ひらみ しげる)

昭和16年和歌山県生まれ。
昭和40年丸五株式会社入社。
平成4年専務取締役就任。
平成10年代表取締役社長就任。

ずいぶん長い間、くい屋・基礎屋と言われてきている。

はっきり言って腹が立つ。社員にも言っている。そう言われて悔しくないかと。言われないために基礎工事のエキスパートとなり、役所・コンサル・設計事務所等と堂々と対等に意見を言い渡り合える技術・能力・知力・自己の能力アップこそが必要。そのためには、勉強と努力しかない。

会社の創立35周年という節目の年に社長に就任し、また40周年という節目の年を迎えようとしており、さらに身の引き締まる思いがする。

一昨年は、わが社にとって偉大な指導者であり、また私にとっての相談相手でもあった、基礎業界の功労者の石島会長を喪うなど、悲しく厳しい激動の4年の歳月であった。そして現在は、バブル崩壊から端を発し、立ち直れないままに金融業界の倒産等々は、全産業を取り巻くデフレスパイラルに陥っている。われわれ建設業界も、言うまでもなく、工事量の激減からの過当競争による価格破壊の厳しい状況下にある。民間企業の設備投資の低迷も続いており、景気回復に向けた策も講じられず、トンネルの出口はまったく見えない状況で、工事それぞれの採算性の悪化もさらに強まっている。

こんな厳しい環境の中だが、前社長の方針を踏襲しつつ、さらに営業力の強化と経費の節減を加え、サバイバルに向け戦略を展開していきたい。

第一は、われわれの企業は受注産業である以上、受注の確保が最大の課題になっている。官公庁・民間、あるいは建築・土木を問わず工事を確保することに全力をあげる必要がある。具体的には、セールスエンジニアリングに力を注いでいきたいと考えている。

第二は、わが社は場所打コンクリート杭の基礎工事の専門工事業者だが、今はただ杭を打設すればいいという時代ではない。元請もぎりぎりの設計で杭を決めている。顧客の満足度をいかにして高めるかだ。

所属するセクションがどんな部署であっても、一人ひとりがその部署のプロであること。これを全社員に再度、徹底させたいと思っている。また、独自性と差別化、自社の特色、特徴にさらに磨きかける。安全・品質・工程短縮・技術力

で競争できる市場の回復が待たれる。

(株)高知丸高の高野社長も力説されていたが、公共事業や土木工事の発注方法も改善されるべきだ。われわれ基礎工事専門業者とVE方式や意見交換を行い、直接受注に参加させることで、経済性においても安全・品質・環境・工期に対しても最適な施工ができるのではないかな。

第三に、つねに気を抜かないこと。気のゆるみが事故やトラブルを生む。一度事故を起こせば、今まで築いた信用、信頼のすべてを一瞬にして失う。丸五ブランドが音を立てて偽ブランドに成り下がるとき、「おごりと停滞は許されない」ということだ。隆盛をきわめて名をあげ、しかし長くは続かず途中で散っていった企業も多い。その原因は、国家盛衰の歴史に見るものとまったく同じである。人にしる企業にしる、あるいは国家にしる、「貧」がトリガーとなって「富」を築き、さらにこの「富」が再びトリガーとなって「貧」を呼んでいることがある。つまり、成功して、そこから得た「富」により満足感に浸るとともに、追いつき、追い越せといった目標を失い、次第に熱意を消失してしまうのである。そして、そのうちハングリー精神旺盛な競争相手に凌駕されて、再び貧の世界に突入してしまうことになる。衰退への方向転換は、飽食感、満足感をもったときにはじまる。つまり、「停滞は許されない」ということだ。

自然界における脱皮という現象が象徴しているように、成長のためには、絶えず新しいものを求め、従来の殻を次々と破っていかねばならない。今は、大手メーカー指導のもと開発した、環境に配慮した新工法である建設残土を発生させない基礎杭工法(つばさ杭)のさらなるレベルアップを目指している。こうした新しい技術開発によって他社との差別化を図り、受注に対しても経済的にも有利に展開できることが、専門工事会社にとって必要不可欠であるはずだ。

現在の売上の大部分は、専門業者としての下請受注となっているが、将来的には元請としての受注を伸ばしていきたいと考えている。

建設業を取り巻く環境は、さらに厳しくなってくると思われる。これからは、価格競争だけでなく、技術に裏打ちされた安全対策と品質の保証および環境への配慮が最優先されるべきだと思う。そんな市場を期待する。

(丸五基礎工業(株) 平見 殖)

編集後記

今年は昨年以上に厳しい1年が予想されますが、新年を迎え皆様には心新たにお過ごしのことと存じます。年頭にあたり三谷会長より『ここ一番踏ん張って、この困難を乗り越ければ、必ずや明るい未来の光が見えてくるはずです。協会も会員の皆さんと協力して、地道ではありますが、実のある仕事に集中する』とのお言葉をいただきました。今が正念場、会員各位におかれましては知恵を振り絞ってこの難局を乗り越えられんことを願っております。

本ニュース発刊にあたり、執筆者の皆様には年末の多忙な中ご協力いただきまして誠にありがとうございました。

(編集分科会)